

かに寄せては返へず浪を弄し、又弄されて千鳥の群は岩より岩へと飛びかうて居ましたが、斯かる際にも絶望の底に沈んだ人の心は益々闇を求めて迷ふものと見え、一人の若者ありて、蒼ざめた顔を襟に埋め、一の岩角に蹲踞つて頻りと吐息を洩して居ました。彼は其覺悟を決めながらなほ、躊躇うて居たのです。

人の足音に驚いて後を振返へると一人の老人が近づいて来る處です。老人が傍に来て、

『日が今昇るのを見なさい、何と神々しい景色ではないか。』と優しく言葉をかけるまで、若者は何を思ふ暇もなく、たゞ茫然と老人の顔を見て居たのです。

『見なさい今だ、今が初日の出だ』と老人は言ひつゝ、海原遠く眺めて居るので、若者も連れられて沖を眺めました。眞紅の底に黄金色を含んだ一團球は今しも半天際を躍出で、暫したゆたうて居る様です。

『神々しいぢやアないか、人間といふものは何時でも此初日の出の光を忘れさへ爲なければ可いのぢや』と老人は感に堪へぬやうに言つて手を合して靜かに禮拜しました。若者も思はず手を合はしました。見ながら日は波間を離れ、大空も海原も妙なる光に満ち、老人と若者は恍惚として此景色に打たれて居ました。

『私は六十になるが斯んな立派な日の出を見たことはない。來年はこれよりも美しい初日の出を拜みたいものだ。あゝ佳い心持ちや』と老人は言つて更に若者に向ひ、『お前さんは何處の者ぢや』と問ひました。

『村の者で御座います。』と若者は僅に答へました。老人は其柔和な顔に微笑を浮べて、

『毎年初日の出を拜みに出るのか。』

『さうでは御座いません。』

『さうか、それでは今年が初めてだの、昔からも一年の計は元旦にありといふから、お前さんも、今日の日の出を忘れないで居なさい。如何ぢや大變顔の色が悪いやうぢやが、そんな元氣のない顔色をして居ては世の中を渡れるものではない、一緒に日の出を拜んだも目出度い縁ぢや、これから私の宅へ來るが可い、雑煮でも祝はう。』

老人は先に立つて行くのだ、若者も其儘後に従き、遂に老人の宅に行つたのです、砂山を越え、竹藪の間の薄暗き路を通ると士族屋敷に出る、老人は其屋敷の一に入りました。

老人の名は大島仁藏、若者の名は池上權藏であるといふことを言へば、諸君は、既に大概の想像はつくだらうと思ひます。

老人は若者の自殺の覺悟を最初から見取つて居たのです、けれども最後まで直接にさうとは一言も言ひませんでした。

屠蘇を飲ましながら、言葉靜かに言つて聞かした教訓は、決して珍らしい説ではなかつたのです。少し理窟を並べる男なら誰でも言ひ得ることなりました。

朝日が波を躍出でるやうな元氣を人は何時も持つて居なければならぬ。

だから人は何時も暗い中から起きて日の出を拜むように心掛けなければならぬ。そして日の入るまで、手あたり次第、何でも御座れ、其日に爲るだけの事を一心不亂に爲なければならぬ。

日は毎日出る、人は毎日働け。さうすれば毎晩安らかに眠られる、さうすれば、其翌日は又新しい日の出を拜むことが出来る。

一日働いて一日送れば、それが人の一生涯である、日の出る時に人は生れて、眠る時に人は死ぬるのである。

老人の言ひ聞かした言葉は先づ斯んなものでありました。そして権藏は奮ひ起つて老人の許を去つたのです。

池上権藏は此日から生れ更りました、元より强健な體軀を持つて居て元氣も盛な男ではありましたが、放蕩に放蕩を重ねて親譲の田地は殆んど消えて無くなり、家、屋敷まで人手に渡りかけたので、遂に失望落膽し、今更ら世間へも面目なく、果は思ひ迫つて大いに決心して居たのです。けれども彼は此日から生れ更りました。

一日又一日、彼は稼ぎに稼ぎ、百姓は勿論、炭も焼けば、材木も切り出す、養蠶もやり、地木綿も織るし、凡そ農家の力で出来ることなら、何でも手當次第、そして一生懸命にやりました。五年目には田地も取返し、畑は以前より殖え、山懐の荒地は見事な桑園と變じ、村内でも指屈の有富な百姓と成り終

せたのです。しかも彼の勞働辛苦は初と少しも變らないのです。

大島老人の病床に侍して、最後の教訓を彼が求めた時、老人は靜かに、

『お前さんは日の出を覚えて居なさるか。』

『毎朝拜んで居ります。』

『お前さんは日の出の盛な處を見て、元氣よく働いたのは宜しい、これからは、其美くしい處を見て、美しい働をも爲るが可からう。美しい事を。』

権藏は暫く考へて居たが、

『それでは先づ如何な事を爲せば可しう御座いませう。』と問ひました。老人は目を閉ぢたまゝ、

『それはお前さんが考へなければならん、お前さんの心で、これは美しいことだと思ふこと、日の出を見てあゝ美しいと思ふと同じやうな事ならば、何でも宜しい。お前さんは日の出を拜むだらう。』

『ハイ拜みます。』

『それなら拜まれるほどのことをなさい。』

『及びもつかん事で御座ります、勿體ないことで御座ります。』と権藏は平伏しました。

『イヤさうでない、お前さんは日の出の元氣を忘れましたか。』

と言はれて権藏は、『解りました、難有う存じます。』と言つたきり、感泣して暫くは頭を得上げませんでした。

大島仁藏翁の死後、權藏は一時、守本尊を失つた體で、頗る鬱いて居ましたが、それも少時で、忽ち元の元氣を恢復し、のみならず、以前に増して働き出しました。

鬱いて居たのは考へて居たのです、彼は老人の最後の教訓を暫時も忘れることが出来ないのです、拜まれる程の美しい事を爲すには何を爲たら可からうと一心に考へたのです。神々しき朝日に向つて祈念を凝したこともあつたのです。ふと、思ひ當つた時には彼は思はず躍り上つて喜んださうです。『自分は

大島先生を拜んでも尙ほ足りない程に思ふ、それならば大島先生のやうなことを爲ればよい。』其處で學校を建てる決心が彼の心に湧いたのです、諸君は彼の決心の餘り露骨で、單純なことを笑はれるかも知れませんが、しかし元來教育のない一個の百姓です、寧ろ其心ばせの眞率で無邪氣な處を思へば實に美しさを感ずるので、僕は。

兎も角も此決心が定まるや、彼は更に五年の間眞黒になつて働き、そして遂に一の小學校を創立して、これを大島仁藏の一子大島伸一に獻じ、大島小學校と命名して老先生の記念となし、一切のことを若先生伸一に任して了つたのです。

以上は大島小學校の由來で御座います。けれども果して池上權藏の志は學校を建てたばかりで、成就しましたらうか。

若し大島伸一先生を得なかつたなら、此小學校も亦た、世間に有りふれた者と大差なく終つたかも知れません。

然し伸一先生は老先生の麗はしき性情を享けて更にこれを新しく磨き上げた人物として此小學校を監督し、我々は第二の權藏となつて教導されたのです、權藏の志は最も完全に成就されました。

忘れもしません、僕が病氣で學校を休んで居ると、先生が訪ねて来て、

『貴様は豪い人になるのだから、決して病氣位に負けてはならん、病氣を負かしてやらなければ』と言つて僕を勵ましたことがあります。伸一先生は決して此意味を舊式に言つたものではありません。

『爲す有る人となれ』とは先生の訓言でした。人は碌々として死ぬべきでない、力の限を盡して、英雄豪傑の士となるを本懐とせよとは其倫理でした。

人は人以上の者になることは出来ない、然し人は人の能力の全部を盡すべき義務を持つて居る。此義務を盡せば則ち英雄である、これが先生の英雄經です。

そして老先生が權藏に告げた言葉、あれが其註解です、そして權藏其人を以て先生は實物教育の標本としたのです。

日の出を見ろとは、大島小學校の神聖なる警語で、其堂々たる冲天の勢と、其飽くまで氣高い精神とこれが此警語の意味です。

一日又一日と、全力を盡くして働く、これが其實行なのです。

伸一先生の柔和にして毅然たる人物は、これ等の教訓を兒童の心に吹き込むに適して居たのです。

そして、先生も亦た、一心不亂に此精神を以て兒童を導き、何時も樂しげに見え、何時も其顔は希望

に輝いて居ました。

小學校生活の詳しい事は別に申しますまい。去年の夏でした、僕は久しぶりで故郷に歸つて見ましたが、伸一先生は年を取つたばかり、其精神と其生活は少しも變りません。年を取つたと言つた處で四十二三ですもの、人間の働き盛です。精神意氣に變のある筈もないのです。

たゞ老いて益々其教育事業を楽しみ、其單純な質素な生活を楽しんで居らるゝのを見ては僕も今更、崇高の念に打たれたのです。

昔のまゝ練壁は處々崩れ落ちて、瓦も完全なのは見當らぬ位、それに葛蔓が這ひ上つて居ますから、一見廢寺の壁を見るやうです。

其壁を越して、桑樹の老木が繁り、壁の折り曲つた角には幾百年経つか、鬱として日影を遮つて居る榿樹が盤居つて居ます。

昔風の門を入ると桑園の間を野路のやうにして玄關に達する。家は僅に四間。以前の家を壊して其古材木で建てたものらしく家の形を作して居るだけで、風致も何も無いのです。

先生は其一間を書齋として居られましたが、書籍は學校用の外、新刊物が二三種床の上に置いてあるばかりでした。

縁邊には豆が古ぼけた細籠に入れて干してある、其横に怪しげな盆栽が二鉢並べてありました。

『東京の仕事は如何です。新聞は毎々難有う、續々面白い議論が出ますなア』と先生は僕の顔を見るや

口を開きました。

『イヤ如何も愚論ばかりで恥かしう御座います。然しあれでも私の力一杯なのです。』

『それで十分です、力の限り書いて其れで愚論なら別に仕方無いからな。けれども楽しみは有ります。

私はこの頃になつて益々感ずることは、人は何んな場合に居ても常に楽しい心を持つて其仕事をするところが出来れば、則ち其人は眞の幸福な人といひ得ることだ。不精々々にやつた仕事に立派な仕事はない、そして一生懸命に仕事する時ほど楽しいものはないやうだ。』

先生の此等の言葉は其實平凡な説ですけれど、僕は先生の生活を見て此等の説を聞くと、平凡な言葉に清新な力の含んで居ることを感じました。

伸一先生は給料を月十八圓しか受取りません、それで老母と妻子、一家六人の家族を養うて居るのです。家産といふは家屋敷ばかり、これを池上權藏の資産と比べて見ると百分一にも當らないのです。

けれども先生は其家を圍む幾畝かの空地を自ら耕して菜園とし、種々の野菜を植ゑて居ます。又五六羽の鶏を飼うて、一家で用ゐるだけの卵を採つて居ます。

書齋の前の小庭は綺麗に掃除がして有つて、其處へは鶏も入れないようにしてあります。

先生の生活は決して英雄豪傑の風では有りません、けれども先生は眞の生活をして居るのです、先生は決して村學究らしい窮屈な生活、ケチ／＼した生活はして居ません、けれど先生の自分の虚榮心の犠牲になるやうな生活は爲て居ません。

僕は先生と對座して四方山の物語をして居ながら、熟々思ひました、世に美はしき生活があるならば、先生の生活の如きは實にそれであると。先生の言論には英雄の意氣の充ちて居ながら、先生の生活は一見平凡極まるものでした。

先生を訪うた翌日でした、使者が手紙を持つて来て今から生徒十數名を連れて遠足にゆくが君も仲間に加はらんかといふ誘引です。僕は直ぐ支度して先生の宅に駆けつけました。それが朝の六時、山野を歩き散らして歸つて來たのが夕の六時でした。先生は夏期休業と雖も常に生徒に近づき、生徒の爲めに時間を送つて居らるゝのです。

諸君の中、若し僕の故郷に旅行せられるやうなことが有つたならば、是非一度大島小學校を訪はれたいものです。海岸に近き山、山には松柏茂り、其頂には古城の石垣を残したる、其麓の小高き處に立つて居るのが大島小學校であります。それが僕の出身の學校なのです。四十幾歳の屈強な體軀をした校長大島氏は、四五人の教員を對手に二百餘人の生徒の教鞭を採つて居られます。

『日の出を見よ』といふ警語は今も昔に變りなく、恰も日の出の力と美とが今も昔も變りのないやうに全校の題目となり、目標となり、唱歌となり居るのを御覽になりませう。

語り終つて兒玉は一呼吸吐くやオツクスホードの紳士は、

『なるほど能く解りました、日の出は力です、美です、そして實は又希望です、僕は貴殿が大島小學校の出身であることを感謝し、誇らるゝことを、當然と思ひます。僕も一度是非お國に參つて大島伸一先

生にもお目にかゝりたる御座います。』

『そして、僕は池上權藏に會つて見たい。』など高等商業の紳士は大眞面目で言つた。

『權藏は今如何して居ますか。』と問うたのはハーバードである。

『さうでした、權藏のことを言ふのは忘れて居ました、益々達者に暮して居ます。大島小學校も今は村の經濟で維持して居ます。が、しかし村の經濟の主腦は池上權藏ですから、學校の保護者は依然として其の昔覺悟まできめた百姓權藏であります。』

權藏の富は今や一郡第一となり、彼の手に依つて色々の公共事業が行はれて居るのです。けれど諸君が若し彼に會つたら恐らく意外に思はるゝだらうと思ひます。

權藏は最早彼は六十です。けれども日の出づる前に起きて日の没するまで働くことは今も昔も變りません。そして大島老人が彼を救うた時、岩の上に立つて、

『來年はこれよりも美しい初日の出を拜みたいものだ。』と言つた言葉、其言葉を堅く覺えて居て、其精神を能く味はうて、年と共に希望を新たに、一日又一日と働らいて老の至るのを少しも感じない様子です。

『老を知らなければ老いず、僕は池上權藏は死ぬるまで老いなければと思ひます。死ぬる今はの際にも、彼は更に一段の光明なる生命を望んで居るだらうと思ひます。不死不朽とはこのことでは御座いますまいか。』

權藏は其居間の床に大島老先生の肖像をかゝげ、其横に日の出の圖が下つて居ます。これは伸一先生に求めて畫いて貰つたのださうです。そして大島小學校の一室には池上權藏の肖像が掛けてあります。

それより一週間ばかり経つて、兒玉進五の宅で彼の所謂同窓會が開かれた。

兒玉は此席で同好俱樂部の一條を話した、他の二人は唯だ微笑したばかり、別に何とも評しなかつた。會毎に三人は相談して必ず月に一度の贈品を大島小學校に送る、それが必ずしも立派な物ばかりではない、筆墨の類、書籍圖畫の類なので、オルガン一臺を寄送したのが一番金目であつた。

『今度は何を送らう。』と兒玉は二人に問うた。

『矢張書籍が可からうぢやないか。』と判事が答へた。

『本なら僕が考へがある。今度會社で世界航海圖の新しいのが出來たから、あれを貰つて送らう、如何だね。』と郵船會社員が一案を出した。

『それも至極妙だ。けれども其他何にしよう。』

『畫は如何だらう。』と判事が一案を出した。

『畫も可いが最早有ふれたものばかりだからなア。』

『實は先日、倫敦の友人から「世界の名畫」と題して、隨分巧妙に刷つてあるのを二十枚ばかり贈つて呉れたがね、それは如何だらうかと思ふのだ。』

『可からう!』と他の二人は賛成した。

『其所で例の唱歌の一件だがね、僕は色々考へたが今更唱歌にも及ぶまいと思ふのだ、如何だらう。』日の出を見ろ」で澤山ぢやアないか。それをなまじつか今の歌人に頼んで作らした所で、ありふれた初日の出の歌などは感心しないぞ。若し作るなら、學校から出た者が作つたのでなければ、とても「日の出を見ろ」の一語で我等が感ずるやうな物は出來ないぞ、如何だらう?』と兒玉の説いたのに二人は異議なく賛成し、兒玉は二人の前で大島校長宛にすら〜と次の手紙を書いた。

『御依頼の唱歌の件は我等三人とも同意致し兼ね候。東京にも歌人の大家先生は澤山あれど我等のやうに先生の薰陶を受け大島小學校の門に學び候ものならで、能く我等の精神感情を日の出の唱歌に歌ひ出し得るもの有るべきや、甚だ覺束なく存候。我等の學校も何時かは眞の詩人出づることあらん。その時までは矢張り「日の出を見ろ」で十分かと存候。日の出の唱歌を歌うて朝寢坊する人物が學校から出るやうになりては何の益にも立つまじく、其邊御賢慮願上候。』

三人は連名で此手紙を出した、大島先生から直ぐ返事が來て、

『御主意御尤に候。日の出の唱歌は思ひ止まり候。淺ましい哉、教室に慣れ候に従つて、心よりも形を教へたく相成る傾き有之、以後も御注意願上候。』



編輯傑作文庫第一編

大正四年五月廿一日印刷
大正四年五月廿五日發行

(定價金四拾五錢)

編輯者

國木田治子

東京市牛込區矢來町三番地中の丸五十八號

發行者

佐藤義亮

東京市牛込區矢來町三番地

發行所

新潮社

電話(番町)二二二三番
振替(東京)一七四二番

印刷者

東京市神田區
宮本町五番地

(中正社)

高橋治一

『縮刷傑作文庫』第二編

縮刷 緣

田山花袋氏作

最上製本
定價五拾錢
送料八錢

——價格は原本の三分の一の低廉となれり——

『生』『妻』と共に花袋氏が三部作の一として高名なる作品也。我が文壇に自然主義の勃興を紀念すべき名篇『蒲團』の續篇とも云ふべきものにして、『蒲團』の女主人公芳子と、その戀人と、而して芳子を愛する師との上に、更に新らしく開けたる運命を描けるの外、國木田獨歩の終焉を詳叙せるもの、頗る事實としての興味に富む。『蒲團』の讀者は須らく此の篇に就いて彼等が戀の發展を尋ねると共に、また作者が藝術の發展を尋ねざるべからず。その主觀の博大と觀察の精銳と描寫の縱横と、總べての方面に於いて花袋氏の藝術の至境を示すものたれば也。

第十二版發賣

獨歩書簡

定價金六拾錢
郵送料金六錢

▲二六新報曰く、其全部を通じて精神的な眞面目な熱力に充ちた調子は深く人を動す就中其戀人に送つた手紙には眞情流露して再三讀するに足る。書翰集として此位の人を引き着ける者はない。
▲日本新聞曰く、殊に獨歩が生命を賭して戀へる佐々木某女に寄せたる數十通の書簡に至りては、痛絶人を泣かしむるものあり。

●一面に熱烈火の如き戀の書簡集也！
於いて

▲讀賣新聞曰く、國木田獨歩が高潮の極に達したのは、明治廿八年佐々木信子との戀愛時代であつた。私は今迄に斯の如く熱烈の戀愛萬能主義の文字を見たことがない。二人の愛を成功するのは人道の爲めだともて叫んで居る。如何なる困難があらうとも二人の愛さへ變らなければ、満足な生活が出来る者と眞に思つて居たのだ。

詩人獨歩の面目を此集に見るべし

獨歩小品

第三版出來
定價三拾錢
郵送料四錢

本書は獨歩氏が最も得意の壇場とせる小品散文詩の類を一切集め、小説家と云はんよりは寧ろ詩人と稱するの適切なる獨歩氏の面目を遺憾なく傳ふるもの也。

▶ 華精の藝文新るれ互に正大治明 ◀

代名作選集

第一編	牛肉と馬鈴薯 (全)	國木田獨步
第二編	坊つちやん (全)	夏目漱石
第三編	蒲團 (全)	田山花袋
第四編	透谷選集 (全)	北村透谷
第五編	春 (上下、二冊)	島崎藤村
第六編	わが袖の記 (全)	高山樗牛
第七編	たけくらのべ (全)	樋口一葉
第八編	爛札 (全)	徳田秋聲
第九編	平凡 (全)	二葉亭四迷
第十編	高野聖 (全)	泉鏡花
第十一編	何處へ (全)	正宗白鳥
第十二編	耽溺 (全)	岩野泡鳴

◀ 錢四冊一稅郵 ■ 錢拾參冊一價定 ▶

情話新集

錢四稅郵 □ 錢五拾參價定 □ 畫裝氏二夢久竹

第一編 ■ 舞鶴心中 近松秋江作

男は京都の有名な旅館の息子で二十三、東京の某大學に學んで近代の思想にも觸れてゐた。女は其の家の召使で未だあどけない十六の美しい少女。此若い二人が、戀のもつれから相抱いて舞鶴の海に投じた。舞鶴心中として世に誦はれたこの事實を、秋江氏が一代の心血を傾けて描いたものである。

第二編 ■ 舞妓姿 長田幹彦作

新らしき西鶴と云はるゝ作者が、京の舞子の戀を描けるもの、新作『しぐれ茶屋』以下何れも會心の作のみである。作者が色彩のゆたかな音樂的な筆は花柳の情話を描くに於いて當代その比を見ない。口紅濃かな京の歌妓の友禪の袂に秘めた戀の物語、あゝ其れはいかに魅力に富んだ文字であらう。

第三編 ■ 小さん金五郎 田村俊子作

小さんと金五郎との哀れに美しい情話は、作者が久しい前から書いて見たいと云つて居たものだが、今漸く世に公にすることゝなつた。流るゝ如き才筆によつて描かれた哀婉な此の物語——戀を全うする爲には死ぬより外なかつた女には、泣いても泣いても泣き足らぬやうな氣がするであらう。

▼京阪情調に充てる傑作集

上司小劍氏作

父の婚禮

最上製美本

▼定價八拾五錢
▼郵税金八錢

目	次
▼天満宮……父の婚禮	
▼東光院……兵隊の宿	
▼鱧の皮……筍 婆	
▼月 夜……畜 生	
▼膳……長火鉢	

現下文壇の中心興味は、實に我が上司小劍氏に集まる。小劍氏が傑作中の傑作のみを選集せる本書は、従つて小説壇の北斗星たらざる可からず。中に於いて、『天満宮』『父の婚禮』は、一個好色の老爺を主として、放態度なき性慾生活を描き、『東光院』『兵隊の宿』は、若き寡婦の戀を描き、『鱧の皮』『筍婆』は、大阪の或る商家の家庭を描く。其他『月夜』以下作者の自信ある傑作を併せて、收むるところ十篇、其の多くは、京阪情調の豊かなるの故を以て興味に富めるは勿論、主觀の洗練と描寫の巧妙と共に近時文壇の驚異として噴々の稱あるもの也。

▼文壇惟一の大作、新たに縮刷成る

縮刷家 (全一冊) 島崎藤村氏作

紙數五頁 最上製美本 定價八錢 送料八錢

——價格は原本の約半額の低廉となれり——

曾て明治文藝界に於ける最大の産物如何を問ひたる時、文壇の諸家は等しく藤村氏の『家』を以て答へたりき。其の量より見るも、其の質より見るも、眞個大作中の大作たる本篇は、優に歐米諸文豪の名作と比肩して世界的大作の名を争ふ可きもの、誠に以て我が邦文壇の誇りとす可き也。描くところ、二大家族の二十有餘年に亘れる歴史にして、幾波瀾、幾情景、凡て人間の悲喜哀歡は悉く此一巻に集り、人生の全圓は、さながらにしてこゝに展開す。あゝ此の篇を讀まずして、誰か日本の小説を讀めりと云ふや。此の**世界的大作**の更に普ねく讀まれんことを冀ひ、こゝに、六號活字の縮刷を公にし、原價の約半額を以て世に頒つ。一讀を請ふこと切也。

泰西名著
の完全譯

新潮文庫

洋布特製美本
一冊二百餘頁

▼一部貳拾五錢
郵税四錢

トルストイ人

生

論相馬御風譯

シエークスピアロメオとジュリエット 久米正雄譯

ゲエテエルテルの悲み 秦 豊吉譯

メテリリンク貧者の寶 吉江孤雁譯

イブセンイブセン書簡集 中村吉藏譯

シニツツレルアナートル情話集 秦 豊吉譯

ツルゲネフは つ 戀 生田春月譯

ビエルンツンフヨールドの娘 野尻抱影譯

ゴーチエクレオパトラの一夜 久米正雄譯

ヘツベルユウテイット 中島 清譯

ドオデエ普 佛 戰 話 後藤末雄譯

シエークスピアハムレット 久米正雄譯

ビエルロチ日本印象記 高瀬俊郎譯

▼以上は皆一冊讀切なり▲

ブリユウ獨身婦 人中村星湖譯

マルコロ旅行記(上下) 生方敏郎譯

バルザック公爵夫人の秘密 高安月郊譯

アナトニス女優タイス(上下) 生方敏郎譯

トルストイ光の中に歩め 阿部次郎譯

ダスタエイ白痴(第五編) 米川正夫譯

イブセン人形の 家中村吉藏譯

ダスタエイ罪と罰(第四編) 中村白葉譯

トルストイ性慾 論相馬御風譯

ダアキン種の起原(第四編) 大杉 榮譯

・現下の出版界、唯一の全譯叢書として聲價益々高し

270
914

終

